

## 特集 高校の英語の授業を知ろう

新学習指導要領を受けた英語教育に求められるもの  
—「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業実践を通して—

上本善之

(兵庫県立山崎高等学校)

## 1. 新学習指導要領を受けて

本年度、新学習指導要領に基づいた新カリキュラムを学ぶ生徒たちが初めて入学してきました。新学習指導要領では、「4技能を総合的に育成する」ことが繰り返し述べられています。科目名もそれぞれ「英語コミュニケーション」「英語表現」「英語会話」と変化し、「読む」「聞く」「話す」「書く」活動を授業の中心とした上で、文法指導も言語活動と一体的に行うことが求められています。また、授業も基本的には英語で行うことから、生徒はより英語を「使う」機会に恵まれることになったと言えるでしょう。ただし、ドリル形式の問題演習や、文法解説の時間が必然的に減少することから、大学入試への不安を覚える教員もいます。この変化にいかに対応するかが、現在の高校教員に求められている課題です。

## 2. 言語習得へのアプローチの変化

言語のルール(文法)を習得するには、①「大量の英文を内在化した後、それを文法的にカテゴライズする方法」と、②「文法を導入した後、演習を通じて慣れさせる方法」があります。①は母語の習得プロセスに、②は伝統的な外国語の習得プロセスに近いものです。①の指導法だけでは、3年間という限られた時間で大学入試に対応する文法力を身につけることが難しく、②の指導法だけでは、Accuracy(正確性)は身につけても、Fluency(流暢さ)が犠牲になります。入試という直近の課題をクリアしつつ、母語に近い実践的なコミュニケーション力を身につけさせるため、①と②をバランス良く指導する必要があります。従来型の指導は②に偏りがあつたと思われまので、新学習指導要領の導入により、

①に比重をシフトしていくことになるでしょう。

本校では、①の前半部(英文の内在化)と、②の後半部(演習)を主に「コミュニケーション英語Ⅰ」が担い、①の後半部(文法的なカテゴライズ)と、②の前半部(文法の導入)を「英語表現Ⅰ」が担っています。勿論、①②ともに横断的であるべきで、特に「英語表現Ⅰ」がただの文法の演習にならないように注意する必要がありますが、教師側の基本的な指導スタンスを示してやったほうが、生徒は授業のポイントを理解しやすいと考えています。

## 3. 本校の授業実践より

それでは、本校の「コミュニケーション英語Ⅰ」を例にとって、実際の授業内容をご紹介します。

まず、「英語の授業は英語で」という雰囲気を作るため、最初の3分程度は英語で雑談をします。“What did you do last weekend?”などと生徒に質問することもあれば、私自身の個人的な話をすることもあります。その際、既習事項の復習や、新しい表現の導入を簡単に行います。例えば、先日、私が風邪で喉を痛めていた時には、“I have been ill since last Saturday, and now I have a sore throat.”と話し、前週に教科書で扱った現在完了の継続用法を確認し、新語“sore”を辞書で引かせて導入しました。教師が現在置かれている状況と関連させることで、教科書の例文よりも、生徒の記憶に強く残ります。他教科ではアイスブレイクにしかならない雑談でも、英語で行えば立派な言語活動です。

続いて、レッスンの導入に移りますが、本校は英語に苦手意識を持つ生徒が多いため、導入にかなり気を使います。ここでのレッスンのTopicへの興味の持たせ方が、その後の学習への集中力に大きく

影響します。兵庫県の全公立高校には大型テレビが配置されていますので、iPadを接続し、関連する写真、動画、ウェブサイト、地図などを紹介して興味を持たせます。この導入も英語で行いますが、全感覚情報の70%以上は視覚から入ってくると言われるように、視覚教材を上手く使えば、英語が苦手な生徒でも乗り遅れることは少ないようです。

各レッスンでは、新出語の発音、品詞、意味を確認し、本文のCDを一度聞かせ、音読をします。その後、3分程度の黙読時間を与え、口頭で質問をして大まかな内容を確認します。ここでは細かい文法には触れず、内容理解のための質問に限定します。質問を理解しやすくするため、例えば、“Where did he put a device to make electricity?”という質問なら、“He invented a device to make electricity. Then, where did he put it?”のように、前置きでストーリーを確認し、疑問文自体はなるべくシンプルにします。特に口頭では、不定詞や関係詞による名詞の修飾は避けています。

次に、本文をチャンクごとに区切ったワークシートを配布します。左側には英語、右側には日本語を配置したもので、押さえておきたい文法や表現の含まれる日本語チャンクを空欄にしておき、生徒に埋めさせます。英語が特に苦手な生徒は、ここで本文内容を理解させます。ワークシートの空欄の意味を確認し、本文の意味、表現、文法を十分に理解させたら、音読活動で表現の定着に入っていきます。

音読活動は、リピーティング、日本語を読んで英語を読む(教師&生徒、または生徒同士のペア)、リード&ルックアップ、シャドーイングといった基本的な活動に加え、時々ゲーム形式の音読を行い、生徒が飽きないよう工夫しています。音読活動の締めくくりは、何も見ずに教師が言った日本語を英語に変換する活動で、この頃にはかなり英文は定着しています。この音読活動への参加意欲を高めるため、定期的に本文の暗唱テストを行っています。

また、各レッスンのまとめに、レッスンの内容に関連した表現活動(ファッションに関するレッスンなら、好きなファッションの紹介等)を行い、自分の意見をクラスで発表する機会を与えています。

以上のように、「コミュニケーション英語I」では、

徹底したインプットとインテイクを行っています。ここで取り込んだ英文が、「英語表現I」や、次年度以降の発展的な活動に繋がると考えています。

#### 4. ミスを恐れないこと

授業で心がけていることは、「説明を最小限にして、生徒の活動時間を多くすること」と、「ミスを恐れないこと」です。「英語の授業は英語で」を実践する上で特に重要なのが後者で、生徒には常々、“Don't be afraid of making mistakes.”と伝えています。我々教師でもミスをします。特に、話し言葉の場合は、母語である日本語でも日常的にミスを犯します。しかし、それを気にすることはほとんどありません。話し言葉は一発勝負で、ミスは避けられないからです。ですから、生徒にも、ミスしてもいいから積極的に発言することを繰り返し伝えます。「英語の授業は英語で」に不安を感じる教師もいますが、教師が間違いを恐れず話す姿勢を生徒に見せることが大切だと思います。そういった姿勢が、「お互いに英語を使う」という雰囲気を作り出します。先日、とある生徒が、どうしても英語の表現が思いつかず、それでもどうにか意見を言おうと、前課で習った表現を使い、“May I speak Japanese?”と自ら断りを入れてきた時には、感無量でした。

#### 5. 最後に

公立小学校における外国語活動が必修化されて2年が経ちました。中学校でも、昨年度より新学習指導要領による授業が実施されています。今後、英語教育においては、小中高の連携がさらに大切なものとなるでしょう。首尾一貫した教育で、生徒達には、様々な状況に対応できる確かな英語力を身につけて貰いたいと思います。しかし、この大きな変化の中で、我々教員が上手く対応できず、生徒に混乱をもたらせば、全くの逆効果にもなりかねません。奇しくも、今年度の兵庫県高校生英語ディベートコンテストの論題は、「日本の全ての小学校は外国語活動を廃止すべきだ」です。英語教育の過渡期で学ぶ高校生は、今の英語教育に何を思い、どんな議論を交わすのか、少なからぬ不安を覚えつつも、非常に楽しみにしています。